

## 安心できる生活をどう守っていくか ②

前回は、福祉医療病院に設置されている医療福祉相談室の活動から、新たな「社会的援護を必要とする方々」が生まれてきている背景や、その原因について考えました。

今回は、前回に引き続き「国際親善総合病院 医療福祉相談室」の医療ソーシャルワーカー（MSW）・佐野知子係長に、相談事例をお伺いしながら今後の支援のあり方について考えてみたいと思います。

## 変わる地域社会で寄せられる相談

前回は、生活環境や人間関係、価値観などが変わる中で生まれてきている、社会的摩擦や排除、孤立などから、新しい問題や悩みを抱えた方々が増えてきていることをお話いただきました。

では今、その現象を背景にどんな問題が医療福祉相談室に寄せられているのか。特に、佐野さんたちMSWの皆さんが注目されている相談をご紹介します。

## 地域社会の一員として必要な支援を

時代とともに生まれる社会問題が絡み合う中で、常に存在する「ホームレス」の問題。最近では、「車上生活者」が現れるなど、状況が多様化してきています。

「経済的理由と一口に言っても、企業の倒産やリストラ等により働く場が減少し、失職してホームレスになってしまう方もいれば、豊かな頃の生活を縮めることが

す。支援を通じ、人間関係を再構築するきっかけを作っていくことも重要です」と話されます。

## 共に暮らす生活者をつなぐ

区内にある県営団地には、国の定住受入れ施策等に伴い、現在多くの外国籍の方が生活されています。こうした方々からの相談が多いのも、相談室の特徴の一つです。

「六、七十代の中国帰国者が多く、非常に高齢化が進んでいることを感じます。幼少期に残留された方が多いこと。また、帰国後学習の機会があっても、高齢で習得が難しいことなどから、日本語を上手く話すことができない方がほとんどです。相談室では受診援助に向け医療通訳ボランティアの協力を得ていますが、独特の発音や方言を使われる方もおり、通訳を介しても意志の疎通を図ることが難しい場合があります。家族の協力があると大変助かるのですが、皆さん、学校や仕事を休ませるような負担はかけたくない、他に頼る人もいないのでボランティアにお願いしたいと言われます」と話す佐野さんの言葉から、地域社会から孤立する外国籍の方々の姿を垣間見ることが出来ます。

そうした現状を踏まえた上で、「言葉や文化の違いから、近隣

との関わりを避け、悩みを抱え込んでしまうことが心配されます。同じ地域社会に暮らす生活者として、一人ひとりの人権を尊重する姿勢を持ちながら、支援のあり方を考えていくことが必要だと感じます」と話されます。

## 制度の狭間にある人を見逃さない

この他、特に最近問題となっている相談について伺うと、

「交通事故や脳卒中などが原因で、遷延性意識障害<sup>せんえんせい</sup>や高次脳機能障害<sup>せうたう</sup>などに苦しむ方からの相談に、どう対応していくかが課題となっています。こうした方々は制度の狭間にあり、支援策がきちんと整備されていません。遷延性意識障害の方は、病状が安定しても転院先がなかなか見つからず、在宅介護を希望されても気管切開し吸引が必要だったり、胃瘻や経管栄養の方は、現行制度のみでは看護・介護は不十分です。高次脳機能障害の方は、身体障害者手帳交付の該当にならず、福祉制度の利用が難しい場合もあります」と話す佐野さん。

こうした状況に対し、「本人はもとより、家族にも大きな負担がかかっていますので、何とか改善策を探るのですが、残念ながらベストの支援をすることが難しいの